慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 中世ロンドンの人口と経済 |
| Sub Title | Population and economy in medieval London |
| Author | 酒田, 利夫 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1998 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.91, No.2 (1998. 7) ,p.355(187)- 364(196) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19980701-0187 |
| Abstract | |
| Notes | 資料 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19980701-0187 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」91巻2号（1998年7月）

資料

# 中世ロンドンの人口と経済

酒　田　利　夫

## はじめに

ロンドン大学メトロポリタン史研究センター（The Centre for Metropolitan History）の所長を務められているD.キーン（Keene）博士が，1997年9月16日-20日に慶應義塾大学を中心に開催された第2回日英歴史家会議出席のため来日され，同会議におけるセッション2「メトロポリス現象――日英の比較――」（The Metropolitan Phenomenon：England and Japan Compared）および比較都市史研究会との共催ワークショップ「中世ロンドンの復元」（Reconstructing of Medeival London）において，各々同題目の報告をなされた。(1) 両報告は，長年にわたるキーン博士の緻密な中世ロンドン史研究を踏まえて，従来の中世ロンドン史解釈を塗りかえる事実を提示し，新たな解釈を試みた極めて興味深い報告であり，本稿は，主として両報告を中心とする博士の研究に基づきながら，これまでのキーン博士の研究によって提示された中世ロンドンの人口および経済に関する新たな事実と解釈を紹介し，かつ若干のコメントを加えんとするものである。

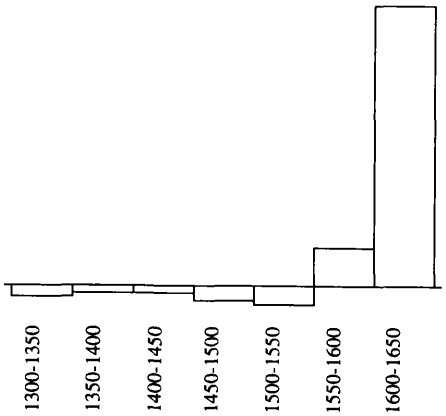
## I

キーン博士のこれまでの研究で最も注目されるのは，ロンドン，特にその中心部チープサイドにおける不動産に関する史料を用いて，中世都市ロンドンの都市空間を通りの1軒1軒の細部にわたるまで詳細に復元することによって，建築密度および不動産価値の長期趨勢を明らかにしたことである。というのも，この研究によって，従来しばしば中世を通じて多かれ少なかれ成長を続けてきたと考えられていたロンドンが，かなりの変動を経験していたことが明らかにされたからであり，まずは人口の変動についてみてみよう。

（1）　Keene (1997a); (1997b).

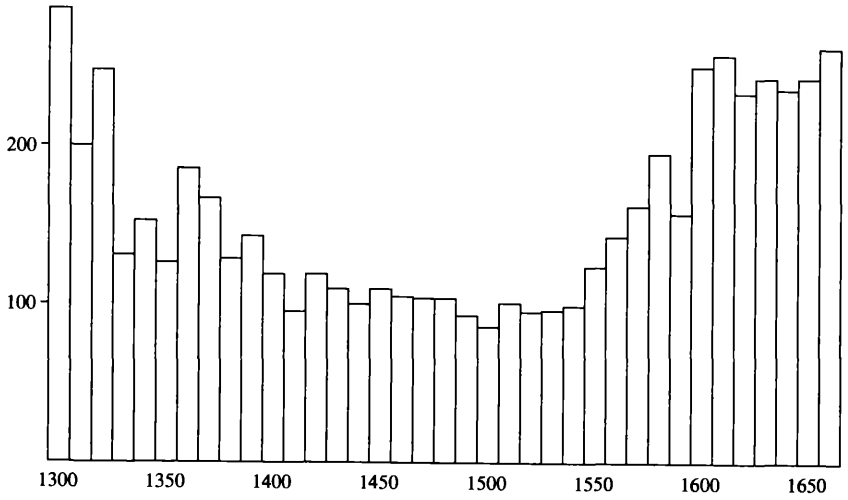
まず，チープサイドにおける家屋の増減を示す図1は，同地域における建築密度の趨勢をあきらかに示すものであり，不動産価値の変化を示す図2は，ロンドン市中心部たる同地域の土地・空間に対する需要の変化をより敏感に示すものといえよう。[4] すなわち，チープサイドの不動産に対する需要は，1300年以降後退し，15世紀には多くの空地・空家がみられ，1600年まで1300年におけると同様の需要が起こらなかったといえるのである。[5]

**図1　チープサイドにおける家屋の増減 (1300-1650年)**[2]




こうした趨勢は，人口および経済の趨勢を反映するものといえるが，より前者を反映するものといえ，キーン博士によれば1300年におけるロンドンの人口は1600年と同様の約8万人を数え，その後14世紀中葉における黒死病の流行による農村の人口減少とほぼ平行して減少・停滞し，16世紀後半以降において増

**図2　チープサイドにおける不動産価値の変化 (1300-1670年)**[3]




(2)　Keene (1985a), p.19 より.

(3)　Keene (1985a), p.20 より. 尚，本図においては単位が記されていないが，セミナーにおける筆者の質問に対するお答えによれば，15世紀後半の平均値を100とするインデックスとのことである。また，ロンドンにおける建築労働者の賃金によって，物価騰貴による増加分を修正してある。

(4)　Keene (1997b), pp.8-9.

(5)　Keene (1985a), pp.19-20.

加趨勢に入るものの，1600年までは1300年の水準を回復しなかったとされるのである。(6)

この点は，ロンドンの人口が全国人口に占める比率の変化にも反映されており，11世紀前半において1パーセントであったその数値は，14世紀には2パーセントに倍増するものの，1520年代においても2パーセントのままに過ぎず，1500-1600年間に5パーセント，1600-1700年間に10パーセントへと急増するのである。(7)

## II

i　中世ロンドンの経済趨勢は，すでにみた人口趨勢に反映されているといえるが，特に1300年にロンドンの人口が8万人に達していたという点が，キーン博士の注目すべき事実発見および主張のひとつであり，そうした大規模な人口が如何に達成されえたのかという点が，もうひとつの大きな論点となる。

この点についてキーン博士は，まずロンドンが，最大かつ最も多様で熟練した製造業の中心であるとともに小売業の中心地であったことを指摘されるが，(8) 今回の報告で最も注目されたのは，ロンドンの発展の鍵が大陸における商業ネットワークとの長期にわたる結びつきにあったことを指摘され，特に外国貿易の発展を重視されたことである。すなわち，ローマ支配の時代以来，ブリテン島内における流通の中心的な位置と何よりも大陸との直接的関係が，ロンドンの繁栄の継続的局面において決定的であり，それは，より速やかには陸路カンタベリ（Canterbury）を経てドーヴァー海峡を渡る通商路と，嵩ばる商品についてはテームズ川を経て大陸のライン，ミューズ，セーヌの河川システムに繋がるより時間のかかる通商路とが存したこと，ローマ撤退後のロンドンは，多少の衰退が見られたものの政治・教会の中心地として生き残り，7-9世紀には，特に現在の低地諸邦（the Low Countries）や北フランスとの強い絆をもとに，再び重要かつ人口の多い貿易中心地となったこと，その後，ヴァイキングの侵入によって上記貿易が妨げられるものの，その商業中心地をローマ時代の市壁内に再確立して近代都市ロンドンの枠組みを形成し，商業の復活とともに再び伝統的な大陸との通商パターンに巻き込まれていったこと，かくして13世紀にはイングランドの外国貿易に占めるロンドンの比率が倍増し，約35%に達したことを指摘されるのである。(9)

さらに中世ロンドンの繁栄に関する博士の議論において注目されるのは，かねてからロンドンが，大陸の他の都市と異なり，多様な機能を併せ果していたこと，特に従来あまり評価されてこなかったその首都機能をより重

(6) Keene (1985a), pp.19-20; (1989), p.101; (1997a), p.9; (1997b), pp.8-9.
(7) Keene (1989), p.99; (1997a), p.4.
(8) Keene (1997a), p.4.
(9) Keene (1989), pp.99-101; (1997a), pp.3-4. 尚，大陸との関係，特に外国貿易については，後述のナイチンゲール博士の論文も重視するところである。Nightingale (1996).

視し，近代的首都機能をすでに確立していたとされる点である。また，その結果として，近世についてF. J. フィッシャー（Fisher）教授が重視したと同様に，ロンドンの発展におけるエリートの衒示的消費（conspicuous consumption）の重要性を指摘された点であり，後者については近く論文を発表されるとのことである。[10]

ii　当該期ロンドンの発展がその後背地に与えた影響については，報告では，それを過小評価してはならないとされ，例えばロンドンから400km内の地域における農村および都市の農業および工業に対する首都の需要および資本のあきらかな影響をみることができることを指摘されたのみであったが，[11] この点はキーン博士の重視される点であり，これまでの研究によってより詳しくみてみよう。

近世における首都の発展が後背地の農業に与えた影響については，すでにフィッシャー教授の重要かつ優れた研究によって明らかにされているが，[12] キーン博士は当該期においてもロンドンが同様の影響を及ぼしていたことを主張されるのである。

すなわち，ロンドン周辺においては野菜および果物を中心とした集約的農業の発展が，その外側においてはロンドン向け穀物生産および家畜の肥育や酪農業の発展がみられ，前者についてはテームズ川上流域，ベッドフォードシャ，ハーフォードシャおよびハンティングドンシャが，また後者についてはレスターシャ，スタッフォードシャおよびウオリックシャが各々特化していったことを指摘される。[13] 図3および図4からも窺われるように，最も高価で長距離輸送にみあう小麦の生産地域が，馬の飼料用オート麦および干草生産地域の外側に展開をみせ，またみずから移動するために輸送費用が安価な家畜の供給地域は，複雑なネットワークを通じてさらにイングランド北部地方や西部地方，そしてウェールズにまで拡大していたことを指摘されているのである。[16]

そうしたロンドン向け穀物取引の中心地として，各々オックスフォードに向かうテームズ川上流域および道路上のヘンリィ（Henley）およびハイ・ワイコム（High Wycombe），ハーフォードシャのセント・オールバンズ（St. Albans），ベッドフォードシャのラトン（Luton），あるいはテームズ川下流域のファヴァシャム（Faversham）やロンドンにより近いバーキング（Barking），ブレントフォード（Brentford）といった小都市の発展が，また家畜取引の中心地として各々ロンドン周辺20kmに位置するロムフォード（Rom-

(10)　Fisher (1948/90); Keene (1997a), p.5. 尚，貴族の衒示的消費についてはバロン博士の論文があり，またキーン博士もすでに下記の論文で指摘されている。Barron (1995); Keene (1990).

(11)　Keene (1997a), p.10.

(12)　Fisher (1935/90); Reed (1996), pp.65-7.

(13)　Keene (1989), p.104; (1995), p.232；酒田（1997），12頁.

(16)　Cambell et al. (1993), pp.60-3; Keene (1989), p.104; (1995), p.230-2；酒田（1997），10-12頁.

図3　ロンドン地域の直営地における穀物生産面積に占めるオート麦生産面積の比率（1288-1315年）[14]

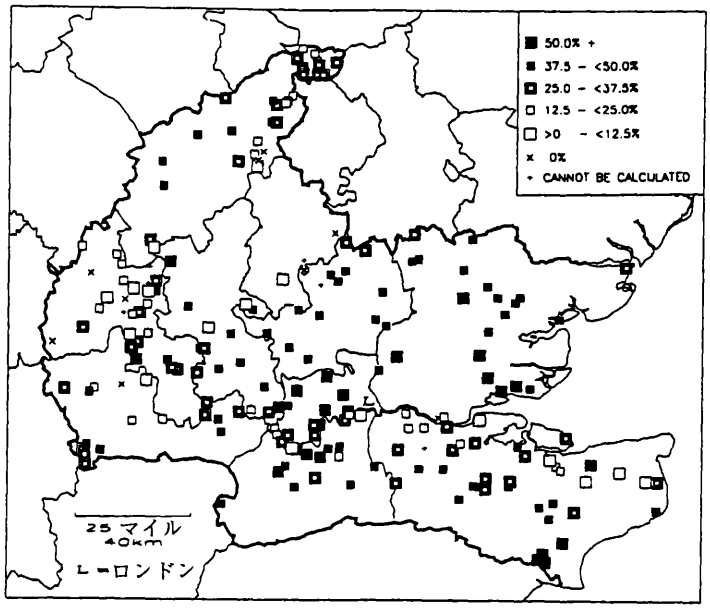
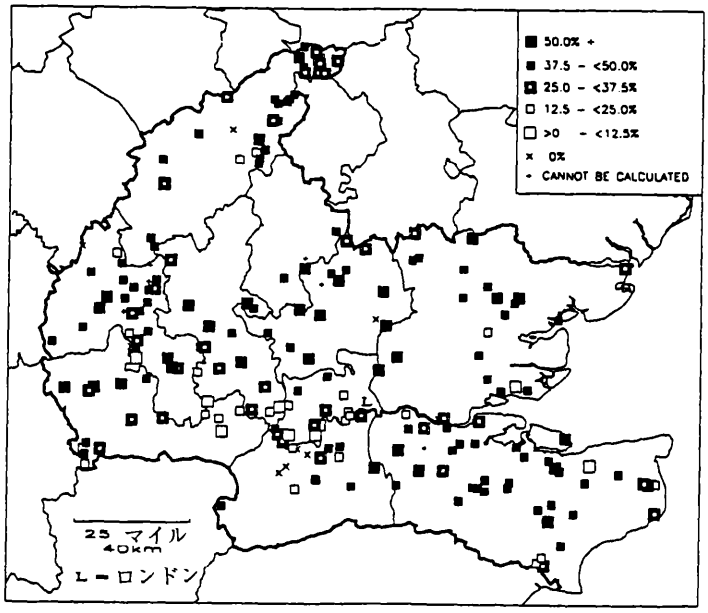



図4　ロンドン地域の直営地における穀物生産面積に占める小麦生産面積の比率（1288-1315年）[15]




(14)　Cambell et al. (1993), p.118, Figure 12.
(15)　Cambell et al. (1993), p.123, Figure 16.

ford）やキングストン・オン・テームズ（Kingston on Thames）といった小都市の発展がみられたことが指摘されている。[17]

また後背地の都市におけるロンドン向け工業の発展についても，エセックスのサクステッドThaxtedにおける刃物製造業やサリィのキングストン・オン・テームズにおける高級陶器製造業の事例が挙げられ，かつ後者については，ロンドンから地方への工業立地の移動の最初の事例であったという興味深い指摘がなされている。[18]が同時に注目されるのは，ロンドンの発展が，むしろ後背地における中規模都市の発展を妨げ，その結果当該地域における都市システムは，ロンドンという単一の大都市によって支配され，中位の中心地のヒエラルキーの未発達な，著しい「太陽」（'solar'）型であったと主張されている点である。[19]

iii　上述のようにキーン博士によれば，1300年に8万人に達したロンドン人口は，その後14世紀中葉の黒死病の流行以降，農村における人口減少とほぼ平行して減少・停滞し，16世紀後半以降において再び増加趨勢に入るものの，1600年までは1300年の水準を回復しなかったのであり，そのことは，ロンドンに対する穀物供給の重要な搬出基地であった上記ヘンリィに，1300年頃には永続的な拠点を構えていたロンドンの穀物商人が，その後消え去り，16世紀に再び出現したことにみられる，ロンドンの穀物需要の減少とその後における復活にも反映されていることが指摘される。[20]

しかしながら，イングランドの富に占めるロンドンの富の比率は，14世紀における2％強から1520年代においては12％に増加しているのであり，この点が今回の報告後の討論においても重要な論点となったが，キーン博士の説明の要点は，黒死病以後における生活水準の上昇とロンドンの相対的な発展であり，前者はおそらく都市における一般的な特徴であったがロンドンにおいて最も著しく，また後者については農村の富の減少による都市の富の相対的な増加を認められた。[21]但し，またロンドンの人口が減少した中世後期においても，ロンドンが依然として移住民の中心地であるとともに，生活水準の上昇により農産物に対する相対的に高い需要を有したために，首都周辺においてはイングランド農村の殆どにおいてみられた人口減少を免れたようであることを付け加えられた。[22]

---

(17)　Cambell et al. (1993), pp.60-3; Keene (1989), p.104; (1995), p.230-3；酒田（1997），11-13頁.
(18)　Keene (1995), pp.233-6；酒田（1997），13-14頁.
(19)　Keene (1989), p.102; (1995), p.227；酒田（1997），9頁.
(20)　Keene (1989), p.104.
(21)　Keene (1989), p.104; (1997a), p.4.
(22)　Keene (1989), p.103.

## III

以上にみたキーン博士の研究は，通りの一軒一軒の歴史的復元という極めて時間のかかる地道な努力の積み重ねによるものであり，チープサイドというロンドンの一地域に限られるとはいえ，都市不動産にかんする長期にわたる極めて具体的かつ信頼しうる客観的な数値が得られたことは重要である。これによって国際的な比較史研究のための貴重な指標が提示されたといえるのであり，この点が博士の研究の最も重要な貢献といえよう。キーン博士が用いたと同様の史料は，博士の指摘されるように，世界中の多くの都市に残存しており，したがって博士の研究に示される都市復元の方法は，国際的な比較都市史研究の基礎を提供するといえよう。というのも，博士が指摘されるように，「物理的環境に焦点をあてることは，それ自体にとっても，またはっきりと記録されていない社会現象を調べる手段としても，都市および社会の比較研究をしばしば悩ませる歴史的および文化的仮定という問題を克服する一つの方法だからである。[23]」

かくして得られた上記の指標に基づく中世ロンドンの人口推計については，P.ナイチンゲール（Nightingale）博士が，まさに博士の研究がチープサイドというロンドンの一地域の研究によっていること，すなわち地域差という問題を指摘しながら，1300年における8万人という推計を過大評価と批判し，6万人というより控え目な数値を提示しているが，重要なことは，これまでほぼ4－5万人で一定と思われていた中世ロンドンにおける人口の趨勢が明らかにされたという点である。すなわち，13世紀に著しい発展を示したロンドンは，1300年には人口6－8万人に達したものの，その後14-15世紀には人口減少がみられたのであり，中世をつうじて大きく変動していたことが明らかにされたことこそが重要なのである。というのも，すでに指摘したように，従来しばしばロンドンは中世を通じて多かれ少なかれ成長を続けてきたと考えられてきており，周知の中世後期イングランドにおける都市の衰退をめぐる論争においても例外的とされてきたからである。[24]

しかしながら，同時にロンドンの占める富の比率が大きく増大したことが明らかにされたことも，また重要である。というのも，すでに別稿においても指摘したように，14-15世紀イングランドにおける人口減少は，疫病

(23) Keene (1997b), p.9. キーン博士は，すでにウィンチェスターについて同様の研究を発表されているが，さすがにロンドンの規模ははるかに大きく，ロンドンの十分の一を占めるにすぎないチープサイドの2－3の教区の研究が，すでにウィンチェスターの研究の頁数を越えているとのことであり，その課題の大きさを示しているといえよう。Keene (1985b); (1997b), p.2.

(24) Keene (1984), p.18. 中世後期イングランドにおける都市衰退をめぐる論争については，さしあたり酒田（1994），第3章および第4章参照。

の流行から生き残った人々にはより多くの一人当りの富をもたらしたのであり，かくしてもたらされた一般的生活水準の上昇による商業化および小都市の発展による都市化の進展については，キーン博士やC.ダイヤー博士をはじめ近年多くの研究者の指摘するところとなっており，この点こそが上記都市衰退論争を整合的に理解する鍵となると思われるからである。(25)

最後に，以上の点とともにキーン博士の報告において注目されたのは，中世から近世への連続性の主張である。この点は，先にR.B.ドブソン教授が行った中世ロンドン研究のサーヴェイ報告においても強く感じられた点であるとともに，また急速に発展する近世ロンドンにおける社会的安定をめぐる論争においてパール教授が強調された点でもあるが，キーン博士の主張は，パール博士が近世における中世的要素の残存を重視されるのに対して，中世において近代的首都がすでに確立していたとの指摘にみられるように，近代的な発展をすでに中世においても認めるものであり，近年におけるイングランド中世経済社会の再解釈において，極めて重要な主張といえよう。(26)

（1997年12月19日成稿）

（経済学部教授）

## 文 献 目 録


Bailey, M. (1993). 'A Tale of Two Towns: Buntingford and Standon in the Late Middle Ages', *Journal of Medieval History*, XIX.

Barron, C. M. (1995). 'Centres of Conspicuous Consumption: The Aristocratic Town House in London 1200-1550', *The London Journal*, XX.

Britnell, R. (1993). *The Commercialization of English Society 1000-1500* (Cambridge).

Britnell, R. H. and Campbell, B.M.S., eds. (1995). *A Commecialising Economy: England 1086 to c. 1300* (Manchester).

Britnell, R & Hatcher, J., eds. (1996). *Progress and Problems in Medieval England* (Cambridge).

Campbell, B.M.S., ed. (1991). *Before the Black Death: Studies in the 'Crisis' of the Early Fourteenth Century* (Manchester).

Campbell, B.M.S., Galloway, J.A., Keene, D. and Murphy, M., eds. (1993). *A Medieval Capital and its Grain Supply: Agrarian Production and Distribution in the London Region circa 1300* (London and Cheltenham).

Duvosquel, J. and Thoen, E., eds. (1995). *Peasants & Townsmen in Medieval Europe: Studia in Honorem Adriaan Verhulst* (Gent).

Dyer, C. (1989). *Standards of Living in the Later Middle Ages: Social Change in England c. 1200-1520* (Cambridge).


(25) Keene (1995); Dyer (1989); (1995); Bailey (1993); Postles (1993)；酒田（1994）；(1997).

(26) Pearl, V. (1979/1990)；酒田（1992/94）. 近年におけるイングランド中世経済社会の再解釈の極端な議論は，A.マクファーレン（Macfarlane 1978）のそれであるが，中世イングランドにおける商業化・都市化の進展に関する最近の研究は，キーン博士の研究の他に，著書および論文集だけでも以下のものがある。Britnell (1993); Britnell & Cambell (1995): Britnell & Hatcher (1996); Campbell (1991); Campbell et al. (1993); Dyer (1989); (1994); (1995); Hallam (1988); Mclntosh (1988) Miller (1991); Miller & Hatcher (1995); Poos (1991).

——— (1994). *Everyday Life in Medieval England* (London).
——— (1995). 'How Urbanized was Medieval England?', in Duvosquel & Thoen (1995).
Fisher, F.J. (1935/90). 'The Development of the London Food Market, 1540-1640', *Economic History Review*, V; later in Fisher (1990).
——— (1948/90). 'The Development of London as a Cetre of Conspicuous Consumption in the 16th and 17th Centuries', *Transactions of Royal Historical Society*, 4th ser., XXX; later in Fisher (1990)；浅田実訳「16・17世紀の誇示的消費の中心地ロンドンの発達」(同編『16・17世紀の英国経済』未来社，1971年）所収.
——— (1990). *London and the English Economy 1500-1700* (London).
Hallam, H.E., ed. (1988). *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. 2, (Cambridge).
Keene, D. (1984). 'A New Study of London before the Great Fire', *Urban History Yearbook 1984*.
——— (1985a). *Cheapside before the Great Fire* (London).
——— (1985b). *Survey of Medieval Winchester*, 2 Vols. (Winchester Studies 2, Oxford).
——— (1989). 'Medieval London and its Region', *The London Journal*, XIV.
——— (1990). 'Shops and Shopping in Medieval London', in *Medieval Art, Architecture and Archaeology in London*, ed. by L.M. Grant (British Archaeological Association).
——— (1995). 'Small Towns and The Metropolis: The Experience of Medieval England', in Duvosquel & Thoen (1995).
——— (1997a). 'The Metropolitan Phenomenon: England and Japan Compared', Unpublished paper presented to Session 2: The Second Anglo-Japanese Conference of Historians.
——— (1997b). 'Reconstructing Medieval London', Unpublished paper presented to Workshop on Urban History: The Second Anglo-Japanese Conference of Historians.
Keene, D. and Harding, V. (1985). *A Survey of Documentary Sources for Property Holding in London before the Great Fire* (London Record Society 22).
Macfarlane, A. (1978). *The Origins of English Individualism: The Family, Property and Social Transition* (Oxford)；酒田利夫訳『イギリス個人主義の起源——家族・財産・社会変化——』(リブロポート，1990年).
Mclntosh, M.K. (1988). *Autonomy and Community: the Royal Manor of Havering, 1200-1500* (Cambridge).
Miller, E., ed. (1991). *Agrarian History of England and Wales*, Vol. 3 (Cambridge).
Miller, E. & Hatcher, J. (1995). *Medieval England: Towns, Commerce and Crafts 1086-1348* (Harlow).
Nightingale, P. (1996). 'The Growth of London in the Medieval English Economy', in Britnell & Hatcher (1996).
Pearl, V. (1979/1990). 'Change and Stability in Seventeenth-Century London', *The London Journal*, V; later in *The Tudor and Stuart Town: A Reader in English Urban History 1530-1688*, ed. by J. Barry (London)
Poos, L.R. (1991). *A Rural Society after the Black Death: Essex 1350-1525* (Cambridge)
Postles, D. (1993). 'An English Small Town in the Later Middle Ages: Loughborough', *Urban History*, 20.
Reed, M. (1996). 'London and its Hinterland 1600-1800: the View from the Provinces', in *Capital Cities and their Hinterlands in Early Modern Europe*, ed. by P. Clark & B. Lepetit (Aldershot).
酒田利夫 (1992/94)，「R.B.ドブソン『中世に

おけるロンドン』」(『比較都市史研究』11巻2号)；後に酒田 (1994) 所収.
――― (1994).『イギリス都市史』(三嶺書房).
――― (1997).「中世イングランドの都市化におけるロンドンと小都市」(『立教経済学研究』50巻3号).